

中国文学批評通史緒論 翻訳 其五：《北宋詩文批評・緒論》訳注(上)

甲斐, 勝二
福岡大学人文学部

東, 英寿
鹿児島大学法文学部

<https://hdl.handle.net/2324/19707>

出版情報：福岡大学人文論叢. 30 (1), pp.435-460, 1998-06. 福岡大学研究所
バージョン：
権利関係：

中国文学批評通史緒論 翻訳 其五

《北宋詩文批評・緒論》訳注（上）

甲 斐 勝 二
*東 英 寿

はじめに

本稿は中国上海復旦大学の顧易生・蔣凡・劉明今の三氏の手になる《宋金元文学批評史》の北宋文学批評史の緒論部分の訳注である。緒論は、「一、歴史文化背景」、「二、北宋前中期詩文批評鳥瞰」、「三、「三蘇」與「蘇門」弟子的詩文批評概術」の三章で構成されている。今回は紙幅の関係上、前半の一、二部分を掲載し、三は次回に掲載することになった。

《宋金元文学批評史》は、復旦大学がシリーズとして刊行している《中国文学批評史》全7分巻の第4巻部分にあたる。上・下2冊巻の全1113頁の力作で、1996年6月に出版された。本訳注で紹介する北宋文学批評史の緒論部分は、顧易生教授の執筆によるものである。顧易生教授の経歴については、甲斐・東による「中国文学批評史緒論 翻訳 其四 顧易生・蔣凡《先秦文学批評史・緒論》」（福岡大学人文論叢第27巻第4号、1996年3月）で既に紹介しているので、あわせて参照されたい。

本訳注においては、書籍名、篇名を示す括弧は、中国の体例に倣い共に《 》を用いている。翻訳はなるべく簡明な日本語訳を心がけたが、翻訳者の理解不足による不明快な訳文も多々あることと思う。また、注釈は、顧易生氏の視点に基づき、訳者として気づいたところに付すように務めたが、どうしても訳者の関心・興味深いところに片寄りがちになっ

* 鹿兒島大学法文学部助教授

てしまった。御批評や御教示をお願いします。

*

顧易生氏の本文を訳す前に、まず訳者として、文学批評をメディア（木版印刷）の発達による文学享受層の増加と、文学を担う層（士大夫階層）の拡大との関連に着目して考察しておきたい。なぜならば、文学批評の発展を考える上で、その前段階として当時文学がどのように浸透していたかを分析することは不可欠であると考えからである。

唐代においても、仏教の経典や曆等が木版印刷されていたことは知られているが、文学作品の刊行は宋代に始まり、次第に発展していく。

宋建国四十五年後の景德二年（1005）、真宗皇帝が国子監に行幸して書庫を閲覧して祭酒・邢昺（932～1010）に書板がどれくらい有るかたずねた時に、邢昺は「国初は四千に及ばず、今は十余萬なり。經史正義皆な備はる。臣少き時儒を業とす。学徒を観るに能く經疏を具する者は、百に一二も無し。蓋し傳寫給せず。今板本大いに備はる。士庶の家皆之れ有り。斯れ乃ち儒者時に逢ふの幸いなり。」（『續資治通鑑長編』 卷60）と述べた。邢昺の若い時は儒書の經疏を入手することが困難であったが、今はほとんどの士庶の家に備わっているという言葉から、景德二年の頃は宋代初めに比べると書籍が容易に入手できる状況であったことを示している。ここから、この四十数年の間に木版印刷の発達が目覚ましく、当時多くの書物が刊行されはじめていたことが窺える。

更に宋代初期の古文家・穆修（979～1032）が、柳宗元の文集を自費で出版し、数百部を携えて都の相国寺で店を設けて売ったという記述が『東軒筆録』にある。一個人が自費で木版印刷を行い、印刷物（書籍）を売ろうとしたことは、当時書籍の売買という経済活動が可能になっていたことを示している。ちなみに、穆修はその際「汝輩能く一篇を読んで句読を失せざれば、吾當に一部を以て汝に贈るべし」と言ったので、結局一年たっても一部も売れなかったという。これは、古文の文章が難解な傾向をもっていたことを示しているとともに、当時の文人達が古文にまだ慣れず、柳宗元の古文に馴染みがなく、句読を施すことさえできなかったことも意味しており興味深い。

また、歐陽脩（1007～1072）は晩年六一居士と号した。彼の「六一居士傳」によると、六つの一にちなんで“六一居士”と号した。すなわち、蔵する書籍一万卷、集録した三代以来の金石の遺文一千卷、琴一張、碁一局、酒一壺、そして吾が一翁を加えて、六つの一

になるので六一居士なのである。ここで注目すべきは、蔵する書籍一万巻である。歐陽脩は、幼い頃父が亡くなり紙や筆を買うこともできず、母が荻の茎で地面に字を書いて教えたと言う逸話も残っていることから想像できるように、裕福な家に生まれたとはいえない。その彼が、書籍を一万巻も所蔵していたということは、当然彼一代で収集したものであろう。とすれば、歐陽脩の活躍していた時代、その意志と財力がありさえすれば書籍を入手することが容易であったと言える。これは、当時木版印刷の発達により、市井で書籍が盛んに流通していたことを物語っている。

更に今一つ、蘇軾（1037～1101）の作品の中に皇帝や朝廷を誹謗した作品があるということで、蘇軾は逮捕され御史台の獄に投ぜられ、黄州へ左遷される事件が元豊2年（1079）に起こった。この事件に関する弾劾文、裁判の完全な記録、蘇軾の供述書、証言の要約や判決文が『東坡烏台詩案』として刊行されている。本来なら極秘であるべきものが民間で刊行されたことは、文書管理の問題や民間でそれらを読みたいという需要があったとともに、その刊行を可能にした木版印刷の発達も要因の一つとして挙げられよう。

以上から、宋代における木版印刷は、前時代と比べものにならないほど発展し、従ってその印刷物を享受する層も一気に増大したことがわかる。文学が広い層に享受され普及しはじめたと言える。

ところで、宋代は従前の門閥貴族が没落し、科挙を通して生まれてきた士大夫が支配階層を形成した時代である。士大夫は政治的には官僚であるが、文化的には読書人である。彼らは、科挙を通して生まれてきた儒教的読書人階層なのである。そして、宋代の学術・文化を担っているのが、この士大夫階層なのである。彼らが通過してきた科挙試験は実力主義であり、従ってその競争は相当激しいものがあった。そのため、科挙試験を志す者は、幼い頃から受験勉強にうちこんだ。それは、教科書や受験参考書等の需要を引き起こし、上述の宋代における出版業をますます発展させることになった。

宋代は、貴族社会のように出生を原理とする閉鎖的社會ではなく、実力・能力があれば科挙を経て出世できるという開放的な社会である。よって、多くの知識人が家柄や身分を頼りにせず文壇・政壇に登場し、文化を担う層ははるかに増大した。これは当然文学批評が前時代よりも盛んになった要素の一つとして指摘できよう。その代表的な例として、たとえば宋代における「詩話」の流行がある。宋代は「詩話興って詩滅ぶ」としばしば擲揄される程、詩に関する文学批評が盛んになった。詩話というジャンルが生まれたのは、直接的には歐陽脩の力によるところが大きいですが、宋代が唐代に比べて詩人や作品数が飛躍

的に増加していることも見逃せない。つまり、詩という文学を担う層の増加であり、それにもなって文学への関心が深まり、文学批評の領域も広がったのである。詩話というジャンルの発生と発展が、宋代における文学批評の盛行を物語っているであろう。

以上見てきたように、宋代は文学を担う層とそれを享受する層がそれぞれ増加し厚みを増した時代である。これは、当然ながら文学批評を促進し盛んにさせた。宋代は文学批評の土壌が拡大し、その底辺が広がりを持った時代なのであった。

北宋詩文批評・緒論

北宋は中国文学批評史上の重要な発展段階である。詩文批評は非常に盛行して、当時の文化のクライマックスを構成する要素となった。

一、歴史文化の背景

西暦 960 年に趙宋王朝が建国された後、晩唐五代以来の長期にわたる群雄割拠の紛争と政権の絶え間のない騒動交替の歴史が終結した⁽¹⁾。中国は百五十年以上の比較的安定した統一が出現し、経済と文化は共に大きく発展した。1126 年に北宋が滅亡し、南宋が一部分の安定の維持を継続することも百五十年に達した。よって宋と漢・唐は「後三代」と称される（原注、元郝經《陵川文集》卷十《温公画像》、趙汴《東山先生存稿》卷一《觀興凶有感》第四首自注、錢鍾書《宋詩選注序》）。国勢の強大さから言えば、宋代はあきらかに漢・唐に及ばない。しかし、その政治・経済には自ら独自の成果があった。なかでも宋の文化の発展は漢や唐の前王朝より大きくそして後の王朝の及ばないところとなった。陳寅恪は「華夏民族の文化は、数千年の進歩を経て、趙宋の世にその極みに達した」と言った（《金民館叢稿二編》第 245 頁）。王国維は《宋代之金石学》の中で「宋王朝の人智の活動は文化の多様化をもたらし、前の漢・唐、後の元・明はいずれも及ばない」と言った。鄧広銘も「両宋の物質文明と精神文明の到達した高さは、中国のすべての封建社会の歴史の中で空前絶後ということが出来る。」（《談談有關宋史研究的幾個問題》）。その間、北宋中期の文化は最も栄え⁽²⁾、「隆宋」はついに「盛唐」と同じく、中国文学史の黄金時期となり、文学批評では唐より一層の隆盛発展が見られた。

北宋の政治・経済の発展と文学批評の発達の関係は、多面的、複層的で詳しく述べつくすことは難しい。ここではわずかに数例を挙げて検討してみる。

宋王朝は文官を任用し、また言責ある職を重視し、科举制度に大きな改革を行った⁽³⁾。これによって政権の篡奪と分裂・動乱を効果的に防止した。新興知識階層⁽⁴⁾は政壇と文壇に登場し、政治、学術思想と文学批評には非常に活発な雰囲気と様子が出現した。

宋の太祖・趙匡胤（在位 960～976）は知識人を重視する政策を制定し、「宰相は儒者を任用すべき」（王曾《王沂公筆録》）と言い、また「士大夫と書簡を奉り諫める人を殺すことは禁止」（陸游《避暑漫鈔》）と定めた。この制度はかなり長い時間にわたって堅持された。明・清の交代期の大思想家・顧炎武もこれが宋王朝の「前人を超える」、「漢・唐

も及ばない」ところだと認めている。(《日知録》卷十五《宋朝家法》)。宋王朝は文官を任用して政權を担わせ、また諫官の地位を高め、諫めることを励まして「宰相と諫官とを分立し對抗させて朝廷で戦」(王夫之《宋論》)させた。その目的は当然ながら双方に互いを牽制させ、それによって君主が平衡を維持できるところにある⁽⁶⁾。宋の真宗(在位997~1022)のいわゆる「異なった意見が牽制し合うこと、つまりそれぞれが悪事をするのができなくなる」(《鉄圍山叢談》卷三)ことだ。そして知識人の強烈な参政意識によって、彼らの批判はしばしば直接に君主と朝廷に向けられて、「君臣のあいだで可否を互いにたすけ」(蘇軾《弁試官職箚子》)る状態を生み、臣權と君權の相互の抑制(すなわち君權を制限すること)というある種類の民主化の実現を求める傾向が生まれた。宋初の田錫、王禹偁から北宋中期の范仲淹、歐陽脩、王安石、蘇洵、蘇軾等は皆皇帝に上書して意見を述べ、時の政治や時事をおしみにく批判し、大胆に自分の意見を明らかにしてはばかるところがなかった。近人の陳寅恪は「六朝及び宋一代の思想はもっとも自由、だから文章も最上のものとなる。」(《寒柳堂集・論再生録》)と言う。「最」字はあるいはほめすぎかもしれない。しかし宋代には確かに相当にゆるやかな言論の自由な気風が存在した。(原注、例えば、漢人が「天下を家とする」《漢書・蓋寛饒伝》の説を作ってより、国家は皇帝の私有財産とほとんど異ならなかった。宋の蘇軾は公然と皇帝に対して言った。「天下は君王の所有ではない。天下が君王をして主としているのだ」と。よって、敢えて直接的に当時の仁宗を批判して言う。「これは私が陛下が勤めていないのを妄りに論じる理由である」と。ここには蘇軾の民主自由精神が示されており、又仁宗の比較的寛容な態度も反映されている。明代の海瑞は嘉靖の時、諫言を進めて言う。「天下は陛下の家であり、その家を顧みない人々はいない」と。その観念は、蘇軾に比べると後退しているが、結果として獄に下され死刑が決まった。しかし、嘉靖年間に急死して難をまぬがれた。この両例を対比してみると、宋・明の言論条件が同じでないことがわかる。金錚《文官政治与宋代文化高峯》を参考のこと)宋の文人の中にも議論を好む風潮は形成された。このような風潮は詩歌等の文芸創作に到り⁽⁶⁾、文学批評の繁栄を更に促進させた。多くの詩文の論者は皆現実を批評した。自分の意見を十分に表現することを創作の主要な任務とした。ここにはある種類の民主精神がきらめき光っている。彼らは前代あるいは当時の作者、作品及び各種類の文體、芸術風格に対する評論においても自由で熱心である。少なからずの批評家は獨自の理論の旗幟を立て鮮明な主體意識を主張した。

漢代の人材任用は役所の推薦を重んじ、有力者はその間を支配することができて、門閥

世族の形成を促進した。魏晉南北朝の九品中正制度⁽⁷⁾は一層門閥政治を示すものとなった。隋・唐時代は、士人が自ら試験に応ずる科挙制度が確立し、門閥勢力に対する打撃となったが、しかしなお唐の時代は実際に上流階級が挙子を「公薦」し有力者の影響から脱却できなかった。毎年の進士も三十人を超えていない。宋代の科挙では鎖院、彌封、及び謄録試卷等の方法⁽⁸⁾を実行して、試験官が「挙子がどこの人、誰の子かわからず、その中に愛憎の厚薄はなくなる」（歐陽脩《論逐路取人札子》）ようにした。科挙志願者の身分制限及び採用人数を俱に広げ、三年ごとに進士に合格した人数は四百人程に達した。度を越えたものとはいえ多くの優秀な知識人が家柄と身分を頼りにせず政壇と文壇に登場した。例えば王禹偁は「先祖代々農家である」⁽⁹⁾、范仲淹と歐陽脩はともに出身は貧しく⁽¹⁰⁾、蘇軾、蘇轍兄弟は西蜀から来たもともと無名の人で⁽¹¹⁾、いずれも科挙の試験に勝利を得て、多くの有能な人々の指導者になった。このことは自然に政界と文学界に新気風をもたらした。宋の進士科試験の内容は初めは詩賦を専ら重んじていたが、一歩進めて策論も兼ねて試み、あるいは経義の考査を主体とした⁽¹²⁾。これ以外に「賢良方正直言極諫」などの制科試験⁽¹³⁾もあって、志願者に国家の政治と社会の実際の重大問題を検討させ解決方法を提出させたのだ。対策では朝廷の政治にかなり激しく直言批判する人がいた。例えば蘇轍の嘉祐六年（1061）の《御試制策》は、朝廷に議論を引き起こした。このことは文学批評に関係があった。（原注、蘇轍《穎濱遺老伝上》にその経過を記して言う。「二十三歳の時、直言を提出した。仁宗皇帝は、自ら策を朝廷で求められた。時に皇帝は、年齢が高く、仕事が面倒になりはじめていた。蘇轍は、問われるところに基づいてその得失を極言した。・・・・・・策が入られると蘇轍は自ら必ず黜けられると思った。しかし、試験官司馬君実第三等にした。范景仁はこれに難色を示した。蔡君謨が言う。「吾は三司使である。司会の言には吾は愧じるけれど決して怨むものではない」と。惟だ胡武平は蘇轍の策は不遜だと思い、努めて蘇轍を黜けるよう要請した。皇帝は許さず言った。「直言を以て召し入れたのに、直言のためにこれを棄てる。天下は私をどう思うか」と。宰相はやむを得ず、蘇轍を下位におき商州軍事推官とした。知制誥王介甫は宰相をたすけて、蘇轍が専ら君主を攻めていると疑い、これを谷永と比較して決して文章を作らなかった。宰相韓魏公は笑って言う。「この人の策語には宰相は用いるに足らず、婁師徳、郝處俊を得てこれを用いるよう望んでいると言う。それでもなお谷永と比べて蘇轍のことを疑うのか」と。知制誥沈文通もまた試験官である。蘇轍を疑う必要がないことを知ったので、文通は制誥を作るに当たって君主の言葉を大切にした。諫官楊安道は皇帝にまみえていった。

「蘇轍は私がすすめた者である。陛下がその狂直を赦して納め入れたのは、盛徳なことである。このことを史官に送付し記録することを乞い願う」と。皇帝は喜んでこれに従った。）策論中に文学問題に論及するものがある。例えば秦觀《進論》の中の《韓愈論》などである⁽⁴⁴⁾。よって宋代の科挙の作用は、明清時代に八股文⁽⁴⁵⁾による人士の採用時の人材と思想を抑圧するものとはかなり違う。

印刷技術の発達⁽⁴⁶⁾と書物刊行業の隆盛は、宋代の生産力と商業経済の発展が文化の普及と向上に対して密接な関連を持っている明確な事例である。（原注、中国の活字印刷と紙幣（交子）はどちらも北宋に生まれた。これは世界で最も早い活字印刷術と紙幣で、北宋の手工業と商業経済の発展の水準が十分にわかる。）中・晩唐期に初めて仏像と歴本等の印刷品が出現したが、その頃読書と作品の流伝は全部手書きであった。五代時代は官本の雕刻印刷の《五経》、《九経》があった。宋代に至ると公的私的な書物刊行業は大いに盛行し、専門の出版業者が出現し、書籍も商品になって広く流通した。北宋前期の穆修は「老いてますます貧しい」けれども、また資本を調達し技術者を募集し、韓愈、柳宗元の文集を数百部刻印し、「京師相国寺に入って書肆を設けて売る」⁽⁴⁷⁾（《穆參軍違事》）。これは知識人自らが出版商となり文学事業を提唱した始まりとなった。蘇軾の《李氏山房藏書記》に当時の印刷業が大いに発展した状況を描写して言う。

私はちょうど老儒者と出会った。彼らは若い頃《史記》と《漢書》を求めたが入手できなかった。幸いに見つければ、すべて手書きで写して、日夜誦読したが、ただそれでは間に合わないことを恐れた。近年の商人は皆摹刻し、諸子百家の本は一日に一万枚をすった。学ぶ者にとって、多くかつ簡単に本を手に入れることはこの様であった。学ぶ人が入手できる文章学術は、昔の人に比べて倍ないし五倍に当たるが、しかし後世の科挙合格者は、皆本を本棚に置いて見ず、無根拠な話をする。

もちろん読書の条件が良くなりながら、逆に読書をしない現象も起こるだろうが、全体的に言えば、当然読書をする人、書物を買う人が多くなったはずなので、出版業者は利益を求めて本が大量に発行されることになる。だから宋代の作者は群をなして起こり、その中には学識豊かな大学者が多い。宋人の詩文理論の中の「学問」「用事」を尚ぶ風潮もそれと関係がある。蘇軾には「作文之意」を論ずるという一則があり、それは味わい深いものだ。

僣耳は数百家の村だけれども、州人の欲しいものは、市場に全部そろっている。しかしたでで手に入れることはできない。必ず一物を納めてのち、これを手に入れ、そ

の後自分で用いるものとなる。一物というのは「錢」である。作文も同じである。天下の事は、經子史の中に散在しているので、ただで手に入れることはできない。必ず一物を持ってこれを納めて、手に入れ自分で使えるものとなる。一物というのは「意」である。おかねをもたないと物をとることができない、意をもたないと事柄を理解できない、これは作文の要点である。（葛立方《韻語陽秋》）

ここでは「錢」をもって作者の意にたとえ、市場商店の各種貨物をもって諸書中の記載にたとえている。当時の貨幣流通と商品経済の発達が文学観念に対して影響の深い事を物語るものだ。貨幣と商品の特色は自由な流通である。蘇軾の作文の議論は、以前の一般文論家の「宗經」「徵聖」とは違う。彼は自分個人の自由意思を主として、そして經、史、子書中の事柄を摂取し、自分のために使用する。このような観念は、彼の父・蘇洵および李觀が公然と「利」を言う事、「欲」を言う事を肯定したこと、彼の先生歐陽脩が「文章は精金美玉のようで、売ると一定の価格がある」（蘇軾《答謝民師書》）と称したこと、および蘇軾の学生黄庭堅が「袖を長くして善く舞い、錢を多くして善く買う」をもって読書の「精博」が創作に対して助けとなることにたとえている（《与王観復書》）こと等、これらはある種類の市民意識を反映している。

もちろん宋代の政治は専制強化されたことで文学を抑圧した側面がある。宋の真宗は詔書を下して浮艶な文体を禁止した。その本来の意は楊億等が詩を作って宮廷生活を風刺することを戒めることにあった⁽⁴⁸⁾。しかし詔書の内容は十分には迅速に貫徹することができなかつたようで、西崑体は依然として盛行した。神宗の元豊二年（1079）蘇軾は詩文に時政を風刺したため、逮捕されて御史台で取り調べられ、その結果黄州團練副使に貶謫された。彼の多くの文学上の友人は連坐して処分を受けた。これは史上前例のない文字獄である⁽⁴⁹⁾。しかし明清時期の文字獄の過酷さには遠く及ばないのである。蘇軾は左遷され黄州に居住している間に、文学創作において「川がまさに流れ至る」⁽⁵⁰⁾ような大きな発展があった。宋の哲宗の元祐八年（1093）以後、蘇軾は再び「先朝を議り排斥した」と訴えられて左遷され嶺南に行った。彼の学生黄庭堅、秦觀もすべて一緒に追放された。黄庭堅、陳師道は詩文を論じるとき蘇軾の「悪口好き」と「怨言と風刺が多い」ことを戒めとした。これはまさにこのような政治圧迫の雰囲気と関連があるのだ。徽宗の崇寧二年（1103）詔書を下して蘇洵、蘇軾、蘇轍、黄庭堅、張耒、晁補之、秦觀等の文集および范祖禹の《唐鑑》、范鎮の《東齋紀事》、劉攽の《詩話》、僧文瑩の《湘山野録》等を禁止し、その版木を「全部焼却」して、厳しい思想と文学禁錮政策を実施した。北宋後期の統

治者は、これから諫言を聞かないことができると思った。しかし彼らの大晟府の楽曲を大いに驚かしたのは金兵の兵馬であった。宋の欽宗靖康元年（1126）に元祐の學術の禁令を解除し、あわただしい対処をしたがすでに北宋の滅亡を救うことができなかった。

二、北宋前中期の詩文批評のみとり図

北宋前期の太祖、太宗、真宗三朝の約半世紀は文学批評の回復発展期である。その当時、批評家の多くは五代以来の卑弱で浮靡な文風を改変することに注意し、唐代の詩文の伝統を継承し発揚することに力を尽くした。なおいまだ宋代独自の文学形態は形成されていないが、しかし流派は並び起り⁽²¹⁾、すでに初期の盛行の氣勢が現れていた。

宋初の第一代の詩文批評家としてはまさに柳開⁽²²⁾、田錫⁽²³⁾、王禹偁⁽²⁴⁾をあげるべきだ。

まず初めに孔孟および漢の揚雄、唐の韓愈等の「道」と「文」を積極的に提唱したのは柳開である。彼は高らかに言う「文章は道の筈である」、「文章は辞が理より華があるのを嫌い、理が辞より華があることは嫌はない」⁽²⁵⁾と。彼の言う「道」の内容はなお、やや空虚で、また芸術性を軽視する傾向もある。柳開は「古文は辞波言苦ではない」⁽²⁶⁾と言ったが、彼の作品はやはり「彼の文体には難澁が存在するを免れない」⁽²⁷⁾。これは彼が理論上揚雄を崇拜することと関係がある。揚雄の文は、艱深を尚び、韓愈の敬慕するところとなった。そして韓愈の文章も奇怪を好む傾向を持つのだ。宋初柳開は古文を提唱した功績があり、後の范仲淹などの肯定を受けた。

田錫は主に政治を議論することに力を尽くし、強烈な社会の責任感と参政意識を表明した。彼は文学を論ずる時自然を崇拜し個性を尊重し、かつ「深情」と「諷刺」を重んじた。雅正と常道の合することを重視して高く評価し、また豪狂に向かい奇変に出ることに心を傾け、「艶歌は理を害さない」⁽²⁸⁾とまで言った。彼は風、水、雲等がたがいにゆり動かされて運動変化する種々の景観をもって文章をたとえ、創作は真情実感から出て人の本性と自然規律とに符合し、体裁風格は多様で拘束を受けるべきではないと説いた。「微風が水を動かせば、さざなみに定まった形はない。大空に浮ぶ雲は、形をさめるものではない」。「物象は私の本性を拘束できない、文采は天真を拘束できない」⁽²⁹⁾。一種の自由精神と主体意識を表し、異端思想の閃光を光り輝かした。後の蘇洵、蘇軾の詩文理論の中にその影響を見ることができる。

王禹偁は「文章によって天下の望みを負った」。彼の詩文理論は比較的明快だ。彼は「文は道を伝えて心を明らかにする」⁽³⁰⁾と表明し、儒家が正直を守り、民生に関心を持つ

内容を強調した。彼は「文章が述べ易く、意味がわかりやすい」⁽³¹⁾ことを強調し、韓愈の文論の中の「文章は難易に関係なく、ただ内容が正しいかどうかだけだ」という説を発展させ、古文が平易で親しみやすい道へ発展するのを導いた。彼は自らが白居易を学ぶことから杜甫に似た所に向かう過程を示したし、更に彼は民歌を学ぶことにも注意している。「誰があわれ悲しむだろうか、好むところが私と同じであることを。（私が好むのは）韓愈、柳宗元の文と李白、杜甫の詩だ」⁽³²⁾。これは王禹偁の唐代の詩文に対する最も良い選択であり、その当時は普遍的同意を得なかったけれども、宋代の詩文が迂回道路を経て、ここに共通認識をもつにいたるのである。

王禹偁とだいたい同時代で些か遅れるものには、太宗時代に起こり主に真宗時代に活動した晩唐詩派がある。その代表作者は潘閔⁽³³⁾、魏野⁽³⁴⁾、林逋⁽³⁵⁾、惠崇⁽³⁶⁾、寇準⁽³⁷⁾等である。彼らは晩唐の賈島、姚合の詩風を慕いまねて、清苦を崇拝し、宋初の詩壇に流行した白居易体のほかに、別に新方面を開いたが、しかし境界は比較的狭かった。潘閔の「髪が一本一本白くなるにしたがって、詩は一字一字清らかになっていく。疑いをさがせば青い海もつきてしまい、恐れを得ては鬼神も驚く」⁽³⁸⁾という詩は彼らの創作態度と審美趣味を示した。林逋の「草のしげる墓に遺稿を捜すある日、《封禪書》がなかったのをちょうど喜ぶようだ」⁽³⁹⁾の句は、清廉高潔な人格と詩の風格を反映している。

真宗の時におこって、三、四十年の長きにわたって風靡したのは、楊億、劉筠、錢惟演等の西崑体詩と駢体文である⁽⁴⁰⁾。楊、劉等は唐の李商隱を範とすることを唱導し、李商隱詩の「措辞」、「萬意」の「深妙」さに感慨し、そして「芳潤を把む」「雕章麗句」を特に重視した。彼らは作品中に諷刺も含ませたので、真宗は詔令を下し、それらを禁止した⁽⁴¹⁾。しかし楊、劉の「天下を驚かせた」「風采」は主に博雅な典故と華麗な辞采であり、それが「五代以来粗雑な言葉の気風」を一掃して、白居易体、晩唐体の詩風は暗然と色を失った。これはまさにその時代の気風の一種の表現である。楊億は杜甫の窮苦の詩と韓愈、柳宗元の朴質の文に不満だったので、その継承も狭いものとなっている。西崑体の末流は文章を美辞麗句で飾るばかりのものと模擬剽竊の弊害を起こしたため、役者が「衣服をつまみとる」⁽⁴²⁾という譏りをまねいた。

西崑体が盛行していた時、姚鉉は古体詩文を提唱するため《唐文粹》を編選した⁽⁴³⁾。穆修は韓愈、柳宗元集を編集発行し売り広めた⁽⁴⁴⁾。その勢力は西崑体と対抗するには十分ではないけれども、穆修の古文の学は「その後尹洙に伝わり、次に歐陽脩に伝わり、そして宋の文章はここにおいて黄金時代となったので、その功績もまた少なくない」のであ

る。

宋の仁宗、英宗、神宗から哲宗までの約70年は北宋文学の創作と理論批評が最も繁栄した時期である。この時期、国家は相対的に安定した時期が長く続き、文化の水準は大幅に発展した。大量の優秀な知識分子が文壇に登場し、歐陽脩、王安石、蘇軾等の、学問が広くて才気が豪俊な大作家と批評家がでてきた。彼らの詩文等の色々な文の体裁の創作と理論の造詣は皆歴史上第一流の水準に達した。蘇軾は、杜甫は詩、韓愈は文のそれぞれ「集大成」者といった。しかし彼自身は一人で詩、詞、文、賦、書法、絵画および文芸批評等の多方面で傑出した成果をあげた。これは誠に歴史上まれにみるどころである。歐陽脩、蘇軾は次々と文壇の盟主となり、そのまわりに沢山の作者が集まった。たとえば、梅堯臣、蘇舜欽、黃庭堅等は詩において、蘇洵、曾鞏、蘇轍等は文において、すべて独自の成就があり、詩文理論批評の面にも各自功績があった。王安石、司馬光は文学批評をその主な活動としたわけではなく、その理論にも偏向があったけれども、独特で精密周到な見解もあった。要するに、この時期の文学批評の領域は群星の光が輝き、千峰競い秀でるようで、前掲の陳寅恪が言った「華夏民族文化」は「趙宋の世にその極みに至った」ことのひとつの標識である。更に次のこともわかる。北宋王朝は「百年無事」（王安石《本朝百年無事劄子》）の中にも各種の社会矛盾を醸成し次第にそれが暴露されて、統治階層中の腐敗現象、遼と西夏の侵略⁽⁴⁵⁾、国防と財政の危機が多くの見識ある人に憂慮を引き起こし、何度も政治と社会の改革が企てられた。仁宗の時范仲淹は新政を指導し⁽⁴⁶⁾、神宗の時王安石は変法を指導した⁽⁴⁷⁾。ほとんどの大部分の傑出した文学家の創作、批評は政治社会の変革と多かれ少なかれつながりがある。彼らの間でいかにして政治を改革するかという見方はたとえ違いがあろうとも、彼らの審美観には愛国の熱意、憂慮意識、進歩的社会と人生の理想、時代色彩に富んだ芸術の主旨を含んでいた。

范仲淹は文風を改革することを政治改革の構成部分として、当時の西崑体末流が「文弊」に入ってしまったので「これを救うには質を以て」すべきと考えた。よって尹師魯、歐陽脩らの提唱した古文運動を積極的に支持した。しかし彼は楊億に対してはやはり非常に称賛したし、近体辞賦を否定もしなかった。范仲淹は唐の柳宗元、劉禹錫、呂温の思想と文章に高い評価を与えているが、この点は特に注意する必要がある。柳、劉等は王叔文政治改革集団に参加して失敗したため、思想中に異端要素をはらんで、長い間歴史家と文学批評家の不公平な待遇を受けた。王安石のいわゆる「今の士大夫の君子たらんと欲する者は、皆自らはふみおこなうべき道にはずかしいにもかかわらず、喜んで彼らを攻撃する」と。

范仲淹は道義上、政治上彼らのために評価をひっくり返し、彼らの文章を「論理と意図は精密で、道との関係が深い」と称した。ここには卓見と勇気がある。

歐陽脩の文芸観は特に精密明快だ。彼は古文を提唱したが⁽⁴⁸⁾、しかし当時流行した怪僻、艱澁の古文に対して非常に不満があり⁽⁴⁹⁾、また「駢文は道理に合えば必ずしも悪いものではない」と認めた。彼が示した「道が勝れば文は至る」、「事実が真実であれば必ず言には文がある」、「広く弁論して道理に深く、当時の弊害に的をあて着目する」等は、同時に皆思想内容の充実性、現実性、実践性と芸術形式の「簡潔で法があり」、「自然に光り輝き」、「毎日新しくなりつづけ」、卓越「自立」することを重視するもので、無理やりに「前人を模枋」せず、或は「屈曲変化して時俗の好むところにしたがう」ものではない。歐陽脩の詩の議論は司馬遷の「発憤して書を著す」、韓愈の「不平不満ならば鳴り響く」等の説を発展させ「立派な詩は苦しい中から生まれる」という説⁽⁵⁰⁾を提出し、更に一步すすめて作者の生活境遇がその創作成果に対する重要な作用を示した。彼は《詩経》の「事に触れ感情が動く」と「賛美」「風刺」等の手法を称賛し、また李白の「天才自放」に非常にあこがれた⁽⁵¹⁾。彼の詩壇での盟友梅堯臣、蘇舜欽の詩風は、一方が雄放、一方が古硬で、歐陽脩は彼らの詩風がそれぞれ長所をきわめていると認めて高い評価をあたえた⁽⁵²⁾。唐の孟郊、韓愈の詩風は一方が窮苦、一方が浩富で、歐陽脩は「ふたりの調子は同じではないが、一緒にするとすばらしい音色をかなでる」⁽⁵³⁾と認めた。これは多種の風格をもつ詩歌が交響和鳴してすばらしい合奏になることを提唱するものだ。歐陽脩の文壇の指導者としての広大な気概を物語る。歐陽脩は《詩話》を著した⁽⁵⁴⁾。これは詩論史上の創舉である。その中に彼は梅堯臣との多くの詩の芸術に関する正確で透徹した意見を記載した。このことは本書の第三編第二章《宋詩話の発展およびその理論批評》の中で紹介しよう。

梅堯臣⁽⁵⁵⁾は詩を論じる時に強調して言う。「ある事件によって心が揺さぶられ、事物によって興味が起こり心が形象化する。下から上を風刺して、こうして《国風》ができた」⁽⁵⁶⁾、「屈原が《離騷》をつくり、自分の志が窮まることを哀れみ、（正義感から）世の嫉妬や邪な意図に憤り、それを草、木、虫に託した」⁽⁵⁷⁾と。彼はまた艱苦を経て文を構想し句を練り「平淡」の境界に到達することへの追求も示している。蘇舜欽⁽⁵⁸⁾は自分の詩を「愁情はただ心に満ちあふれるばかりで、高くけわしくて（その高さを）一様にそろえることができない」と称し、石曼卿の詩を「世を覚醒させて民衆を励ます」、「気概が横逸して意志が持ち上がる」⁽⁵⁹⁾と称した。これは蘇舜欽の豪放雄奇の気風への憧れを反映して

いる。彼はまた人々が詩歌を通して感情を発露する必然性と国家の統治者が民衆の声を聞きその政策を整える必要性を肯定した。蘇、梅の詩論において、崇拜する芸術風格は同じではないが、この二人とも詩歌の抒情の特徴、現実性、批判性と社会作用を非常に重視し、民主的要因を備えている。

李觀⁽⁶⁰⁾は文学が「利を言う」、「欲を言う」ことができることを承認し、これは「人生」と「人情」の正当な要求だと考えた⁽⁶¹⁾。このような論説は世間一般の文学観を反映し、歐陽脩らが詩文中に表した観念を彷彿させるが、しかし歐陽脩はなおいまだこのような観点をその詩文理論中にはっきりと発表しなかった。曾鞏⁽⁶²⁾は賈誼の文章を論じる時、その「天下の健康を回復する」、「時局と国家を憂う」の心情態度、「毅然としてなんら恐れるところがない」と「言おうとすることを十分に言う」という創作態度を抽出することに留意した。これは宋代の詩文革新運動の中の作者の志向と風格、気概を表明するものだ。歐陽脩と蘇軾は皆賈誼の文を重視した。李觀と曾鞏も文学の政治的道德教化の作用を強調した。彼らの司馬遷《史記》の中の反儒学思想の部分、及び諸子百家の異端学説に対する否定は、二人の文学観の保守的要素になっている。

王安石は文学が現実政治のために奉仕することを極力強調した。彼は言う。「かつて文と言うのは、礼教治政のこののみ」、「いわゆる文とは、世を補うことを仕事とするだけだ」、「まさに役立つことが本質なのだ」と。彼は文辞の芸術形式が器物上の彫刻した絵のようなもので、無いわけにもいかないが第二義的であるべきだと考えた。彼は歐陽脩の文章について、まず歐氏の「器質」、「智識」、「學術」の蓄積が深く、故にそれがあらわれて文章が鮮やかに光り輝くと強調する。王安石の《杜甫画像》は杜詩の国家民族を憂慮する思想と自分の利益を度外視して人を助ける精神を示して⁽⁶³⁾、南宋初の胡仔にこれが最もよく杜甫の「平生心を用いたところ」を知る作品と評価された。しかし王安石は、韓愈、柳宗元の作文芸術に関するある種の論説には不満もあり、韓愈の「陳言を努めて除去する」は「かわいそうについやした精神を補うことがない」と批判した。また、王安石は李白を「見識が下劣で、十首の詩中九首は婦人と酒を言う」と見なしていたと伝えられる⁽⁶⁴⁾。これらは彼のもつ実用文学観の狭さを明らかに示している。王安石は晩年でも詩歌の芸術鍛錬を非常に重視し、詩の句律、対偶等の手法に対する分析は非常に精密周到である。「見た目は尋常のようであるが実は最も奇崛で、できあがりは容易であるようだが実は艱辛」などの詩句は、一種の平易な言葉で人に近づきやすいが格力は奇崛で平凡ではない審美理想と艱難辛苦から鍛錬して自然天成の創作境界に達することへの追求を物語っており、芸

術弁征法の要素を備えている。これらは梅堯臣の詩論から得たもので、黄庭堅および江西詩派にある程度の影響を与えた。

王令⁽⁶⁵⁾は王安石に特に称賛された。彼には「詩が存在するのは道を載せるためだ」⁽⁶⁶⁾という説がある。「載道」で詩を論じた初めての人となり、（その説は）理学家周敦頤の「文は以て道を載せる」説とほぼ時期を同じくするが、しかし「道」に関する内容は違っている。王令の崇拜した詩道は「礼義政治」を主としており、王安石の「文は礼教治政」の説とぴったり合う。王令の少なからずの詩から、当時の不合理な現実への深刻な批判と高遠な理想を抱いていることを見ることができ、いわゆる二王の「礼義政治」と「礼教」は封建専制と陳腐な教条と同等に見なせるものではなく、その中には進んだ要素が含まれている。王令の杜甫、韓愈、孟郊等の詩を賛美する中には「物象をきりやのみで突き通す」、「浩大で切り立ったがけがない」、「喜んで怪を自ら楽しむ」の芸術趣味が表現されている。宋代の梅堯臣、歐陽脩からは皆韓愈の「文を以て詩を作る」影響を受けたが、その中でも韓愈・孟郊の詩風に最も傾倒したのはもちろん王令であった。

司馬光は「文は道を明らかにする」⁽⁶⁷⁾もので、また「道は民の益のため」⁽⁶⁸⁾だと宣言した。彼は「辞」が「意味が通じれば十分で華やかな言葉は必要はない」、詩の「見掛けは立派だが中味がない」ものは「曹植、劉楨、鮑照、謝靈運のように壮麗であっても、実用に益がない」⁽⁶⁹⁾と認め、また「文が勝って道が至らないのは」もっと害があると指摘した。よって莊子を「口の達者な人」⁽⁷⁰⁾と称したのである。しかし、司馬光はやはり詩文の創作を重視し、「芸術の美は文に比べるものがなく、文の精は詩に比べるものがなく」と再三述べた。これは彼が詩の審美価値に対してやはり相当な認識があることを反映している。（以下続稿）

注 釈

(1) 907年に唐が滅亡すると、華北には朱全忠の建てた後梁に始まり、後周に終わる五つの王朝が興亡し、そのほかの地域では前蜀・後蜀・呉・南唐などの十国が抗争を繰り返して分裂状態であった。960年に後周に代わり宋が成立し、この分裂状態も終結へと向かった。すなわち、宋は963年に楚を、965年に後蜀を、971年に南漢を、975年に南唐を次々と滅ぼし、979年に太宗が北漢を降し、中国の統一を成し遂げた。

(2) 明・顧炎武《日知録》巻13、宋世風俗の条によると「真仁の世、田錫・王禹偁・

范仲淹・歐陽脩・唐介の諸賢、直言讜論を以て朝に倡す。是に於て中外の薦紳は、名節を以て高しと爲し、廉恥相ひ尚ぶを知る。盡く五季の陋を去る」とあり、宋の第三代真宗（在位 997～1022）、第四代仁宗（在位 1022～1063）の頃になると、五代の余風は完全に取り除かれたことを指摘する。とりわけ、仁宗皇帝の慶暦年間（1041～1048）は、宋代の土風が大いに変わったされ、“慶暦の治”と言われる。国勢の刷新を企図した所謂革新運動が、范仲淹や歐陽脩を中心におこったのである。この政治的な改革は結局失敗に終わったものの、こうした革新的な気運は文人達の民族的自覚を促す契機となり、当時形骸化していた儒教の新解釈による再興の形を取り、所謂道学（宋学）の発展へと繋がり、それを表現する手段としての文体の改革が加速された。

（3）宋代は科挙制度が完成された時代だと言われ、その制度は明・清時代に受け継がれたものも多い。荒木敏一氏の《宋代科挙制度研究》（東洋史研究会、1969年）によると、宋代に行われた重大な科挙の改革は、次の九つが挙げられる。

- ①殿試の創設（いわゆる科挙三層制の確立）（太祖朝）
- ②登第即釈褐の創始（太祖朝）
- ③別頭試の設置（太祖朝）
- ④糊名法及び臚録法の設定（太祖⇒仁宗朝）
- ⑤三歳一貢の制の制定（英宗朝）
- ⑥殿試における策問の採用（神宗朝）
- ⑦明経諸科の廃止、進士科一本槍の確立（神宗朝）
- ⑧殿試における黜落制の撤廃（仁宗朝）
- ⑨進士科における詩賦の廃止、経義・論・策の採用（神宗朝）

（4）唐以前の門閥貴族とは異なり、科挙試験を通して生まれてきた文人官僚のことである。家柄や門地に左右されず、自らの能力如何により出世し、宋代の権力者階層を構成した。士大夫とも呼ばれ政治的には官僚、経済的には地主、文化的には文人・読書人である。宋代の皇帝専制体制を支えるのがこの新興知識階層＝士大夫階層であったと言えよう。

（5）諫官は、本来天子に対する諫言を職責としていたが、宋代になって君主独裁制が強化されると、諫官はその批判を宰相などの時の政権へ向けるようになった。更に本来官吏の監察・弾劾を司っていた御史台にも国政批判が許されることになり、ここに諫官と台官が国政批判で同一行動をとるようになった。この御史台と諫官を合わせて台諫と呼ぶ。そしてこの台諫と政府の政権担当者である宰相・参知政事等の間でしばしば意見の対立が

起こり、一種の緊張関係を生み出した。この緊張均衡関係は、政府の暴走を阻止するとともに宋代の君主独裁体制を支えることとなった。

(6) 宋代は詩人数が唐代に比べると増大し、また一人の詩人の詩数も増加した。これは、宋詩の特色も多様化・多彩化、或いは分散化したことを物語っていると見えよう。そこで宋詩の代表的特色を以下にあげると、たとえば題材の広がり、すなわち生活に密着し日常生活の細部までも詩の中に取り入れたこと、社会や政治に批判的な詩が唐代よりも増大したこと、唐詩と比べると圧倒的に悲哀の詩が少なく宋詩の持つ平静さを特色づけること等、その全てを簡単に言い表すことはできないが、その中でも注目すべき特色として、所謂「議論を以て詩を為す」という宋詩の性質が挙げられる。論理的な言葉を理知的に叙述することで、これは宋が中国哲学の大成期であったことと繋がる見えよう。宋代の詩人は、たとえば北宋の歐陽脩、王安石、蘇軾や南宋の楊萬里などがそうであるように、皆儒学哲学の古典の注釈者であり、哲学者としての顔も合わせ持つ。人間とは何であるか、如何生きるべきかを切実に考え、そうした哲学の叙述を詩の中に持ち込み連ねる傾向も生じたのである。参考、吉川幸次郎《宋詩概説》（中国詩人選集二集、岩波書店、1962年）、小川環樹《宋詩選》（筑摩書房、1967年）等。

(7) 全ての官職を一品から九品に至る九等級の位階に分け、地方の郡国にそれぞれ中正という職を設け、この中正が管内の人物について郷里での評判を参考にして一品から九品の等級をつけ、政治がそれに依じて官職を任命する制度。魏が成立する直前につくられ、隋代の科挙制成立まで行われた。貴族社会を生み支えていく制度となった。

(8) 鎖院とは科挙の試験の際に試験場の門を封鎖して試験をすること。彌封とは糊名とも言い、答案の巻首を封印すること。すなわち、答案の始めに書く姓名、貫籍、三代の名諱等を糊付けにすること。臚録とは答案の全てを写し取ること。この彌封法、臚録法の採用により、試験官は受験生が誰かを特定することができなくなり、試験官の情実によって受験生を採用するということができなくなった。ちなみに、彌封法が宋代に最初に採用されたのは淳化三年（992）の殿試で、景德四年（1007）には省試に導入され、それともなって、彌封の専官を置き、諸州解試では明道二年（1032）に導入された。一方、臚録法は大中祥符八年（1032）に省試に採用され、景祐四年（1037）に諸州解試で採用された。参考、前掲荒木敏一《宋代科挙制度研究》。

(9) 王禹偁（954～1001）字は元之、済州鉅野の人である。彼は北宋初期に平易で分かりやすい古文を主張した古文家の一人である。王禹偁の家が先祖代々農家であったこと

は、《宋史》巻293、王禹偁伝に「王禹偁、字は元之、濟州鉅野の人なり。世々農家為り」という記述からわかる。また、《荅溪漁隱叢話前集》巻25には「西清詩話に云ふ。王禹偁元之、父本もと磨家、畢文簡士安州の従事と為る。元之其の父に代わりて麵を輸ぶ・・・」とある。磨家とは麦を研いで麵にする家のことである。

(10) 范仲淹(989~1052)字は希文、蘇州呉県の人である。范仲淹の父、范墉は仲淹二歳の時、すなわち淳化元年(990)徐州の掌書記在任中になくなる。下級官吏であったため、俸給も少なく他にこれといった財産もなく、母・謝氏は幼い子供を抱え途方に暮れた。しかも謝氏は後妻のため范墉が亡くなると范氏一族のなかにとどまることもできず、親戚も知り合いもなく生計を立てる術がなかったため、結局長山の朱氏に再嫁した。この様に范仲淹は実の父の顔も知らずに困窮のなか幼少時代を過ごしたのであった。

一方、歐陽脩(1007~1072)字は永叔、号は醉翁または六一居士、廬陵の人である。父の歐陽観が脩四歳の時死去したため、その後は叔父の歐陽曄の家に身を寄せることとなった。歐陽脩の母・鄭氏が後妻であったこと、また叔父の家も経済的に恵まれなかったため、叔父の態度は歐陽脩に対してやや冷淡であったようである。そのため、歐陽脩の母・鄭氏は、彼のために文房具を買うこともできず、荻の茎を折り取りそれで地面に文字を書いて教えたと言われる。

(11) 蘇軾(1037~1101)蘇轍(1039~1112)兄弟は、四川省眉山の人で中央では全く無名であったが、嘉祐の始め(1056年頃)父蘇洵とともに都・開封へ行き、その文章を幹林学士歐陽脩に激賞されたことによって文壇に知られることになる。嘉祐二年(1057)の科挙試験に於いて、権知貢挙・歐陽脩が当時流行の險怪奇渋の太学体の古文を斥け、明快達意の古文を採用し、以後科挙の文体が大きく変わる。この科挙によって、蘇軾、蘇轍は上位にて及第を果たした。なお、歐陽脩が斥けた太学体が險怪な古文であったことについては、東英寿《太学体考—その北宋古文運動における一考察—》(日本中国学会報40、1988年)を参照されたい。

(12) 進士科において詩賦だけでなく策論もあわせて試験するようになったことについては、次にあげる《續資治通鑑長編》巻113、明道二年(1033)の記事が参考になる。「上、輔臣に諭して曰く、近歳進士の試する所の詩賦は浮華多し。而して古を学ぶ者は或は以って自ら進むべからず。宜しく有司をして兼ねて策論を以って之を取るべし。」時の仁宗皇帝が進士科の詩賦における浮華の傾向を憂慮して、策論を加えるように指示したのである。また、具体的に当時の進士科の内容が窺える例として、慶曆四年(1044)に范

仲淹や歐陽脩が上奏した科挙の改革案を取り上げてみたい。《續資治通鑑長編》巻 147 によると、それまで科挙の試験では第一場から順に、詩賦・論・帖墨を以て行われていたものを、策・論・詩賦の順に変え、諸科においては經書の意義を問うようにした。この上奏文から当時の進士科の内容を窺い知ることができよう。

(13) 宮崎市定《科挙》（中公新書）によれば、制科とは普通の科挙試験の網では掬えないような大物を別の試験で採用しようと試みたもので、天子の詔によって不定期的に行う試験である。宋代にも制科は行われており、宋初は賢良方正能直言極諫科、經学優深可為師法科、詳閑吏理達於教化科の三科が行われ景德年間（1004～1007）は六科、仁宗朝では十科が行われた。

(14) 秦觀（1049～1100）は、一般には詞人として知られており、北宋の婉約派の詞人の代表の一人である。その他、彼には詩が 430 余首、辞賦が 10 篇、散文が 257 篇今日に残っている。《韓愈論》は《淮海集箋注》（上海古籍出版社、1994 年）の巻 22 に収録されており、韓愈を極めて高く評価している。その中でたとえば秦觀は、「蓋し前の作者多し。而れども愈より備はること莫し。後の作者も亦多し。而れども以て愈に加ふること無し。故に曰く、総じて之を論ずれば、未だ韓愈に如く者有らざるなり。」と論じている。

(15) 八股文は、明代の初め、科挙試験の答案として制定され、明・清時代に盛行した特殊な文体の名称である。破題・承題・起題・入題・虚題・中股・後股・束語・結語から構成されている。詳しくは《中国文化叢書 4 文学概論》（大修館書店 1967 年）を参照されたい。

(16) 北宋における木版印刷の発達・隆盛については、本稿の「はじめに」部分でも取り上げた次の記事が参考になるであろう。それは、宋建国四十五年後の景德二年（1005）、真宗皇帝が国子監に行幸して書庫を閲覽し、祭酒・邢昺に書板がどれくらい有るかたずねた時に、邢昺が「国初は四千に及ばず、今は十余萬なり。經史正義皆な備はる。臣少き時儒を業とす。学徒を覩るに能く經疏を具する者は、百に一二も無し。蓋し傳寫給せず。今板本大いに備はる。士庶の家皆之れ有り。斯れ乃ち儒者時に逢ふの幸いなり。」（《續資治通鑑長編》巻 60）と述べた記述である。邢昺の若い頃經書の勉強をする際、書物を入手することが困難であったが、今はほとんどの士庶の家に備わっているということから、宋代に入り木版印刷の発達が目覚ましいものであったことが窺える。

(17) 穆修（979～1032）が、柳宗元の文集を自費で出版し、数百部を携えて都の相国寺で店を設けて売ろうとした。その際、穆修が「汝輩能く一篇を読んで句読を失せざれば、

吾れ當に一部を以て汝に贈るべし」と言ったので、結局一年たっても一部も売れなかったという。これは、当時の古文の文章が「辞澁言苦」（柳開《応責》の語句）で難解であったことを示している。本稿「はじめに」部分参照。

(18) 《續資治通鑑長編》卷71 真宗の大中祥符二年の記事には次のように言う。「御史中丞王嗣宗曰く、幹林学士楊億、知制誥錢惟演、秘閣校理劉筠宣曲等を唱和し、前代の掖庭の事を述ぶ。詞は浮靡に渉ると。上曰く、詞臣なり。学ぶ者の宗師なり。安ぞ其の流宕を戒めるざる可けんやと。乃ち詔を下して学ぶ者に風勵す。今より詞浮靡に属し、典式に遵はざる者有れば、當に嚴譴を加ふるべし…」ここから、真宗が詔を下して、浮靡な文を戒めたことがわかる。ただ、その直接のきっかけは、楊億、錢惟演らが宣曲詩を作り、宮廷生活を風刺したことであったことが明らかに窺える。

(19) 蘇軾(1036~1101)、字は子瞻、号は東坡居士、四川眉山の人。蘇軾は元豊2年(1079)7月28日に作品の中に皇帝や朝廷を誹謗した作品があるということで逮捕されて任地潮州から都に連行され、8月18日に御史台の獄に投ぜられた。以後6、7週間にわたる長い取り調べが行われ、その結果蘇軾は黄州に左遷されて、関連する閣僚29名を刑罰に処した。この事件に関する弾劾文、裁判の完全な記録、蘇軾の供述書、証言の要約や判決文が《東坡烏台詩案》として刊行されている。「烏台」というのは御史台の雅名である。なお、東坡烏台詩案の流伝については、内山精也氏の《「東坡烏台詩案」流伝考—北宋末~南宋初の士大夫における蘇軾文芸作品蒐集熱をめぐって—》(横浜市立大学論叢人文科学系系列第47巻第3号、1996年)を参照されたい。

(20) 蘇轍《亡兄子瞻端明墓誌銘》に「既にして謫せられ黄に居し、門を杜ざし深居し、翰墨を馳聘し、其の文一変し、川の方に至るが如し」とある。

(21) 宋代初期は、白居易を宗とする白体詩派があり、また唐代の賈島、姚合を宗とする晚唐詩派、更に李商隱を宗とする西昆派があった。本書第一篇第二章第四節参照。

(22) 柳開(947~1000)字は仲塗、東郊野夫、捕亡先生と号した。大名(今の河北)の人。開寶六年(973)の進士。宋初の代表的古文家。本書第一編第二章第一節参照。

(23) 田錫(940~1003)字は表聖、嘉州洪雅(今の四川省)の人。太平興国三年(978)の進士。官は右諫議大夫、史館修撰に至る。《咸平集》がある。本書第一編第二章第二節参照。

(24) 王禹偁(954~1001)字は元之、濟州鉅野の人。家は代々農家で、太平興国八年(983)の進士。官位は翰林学士、知制誥に至った。晩年に黄州の知事であったので、王

黄州とも称される。注（9）及び本書第一編第二章第三節参照。

（25）「文章為道之筌」、「文惡辭之華于理、不惡理之華于辭」は、いずれも柳開《上王学士第二書》に見える。

（26）柳開《應責》の語句。

（27）たとえば、《四庫全書総目提要》巻152、集部、別集類《河東集》の条に、柳開の文章の難解さを評して「…則ち宋朝偶麗を変じて古文を為くるは、実に関より始まる。惟だ体は艱澁に近し。是れ其の短ずる所のみ」と言う。

（28）田錫《貽陳季和書》の語句。

（29）「微風動水、了無定文、太虚浮雲、莫有常態」、「物象不能桎梏於我性、文采不能拘限於天真」はいずれも田錫《貽宋小著書》の語句。

（30）「以文章負天下之望」は、王禹偁《答鄭褒書》の語句で、「夫文傳道而明心」は王禹偁《答張扶書》の語句。

（31）王禹偁《答張扶書》の語句。

（32）王禹偁《贈朱巖》の語句。

（33）潘閔（?～1009）字は逍遙、一説には逍遙子と号した。大名（河北）の人。一説には廣陵（今の江蘇揚州）の人。本書第一編第二章第四節参照。

（34）魏野（968～1019）字は仲先、陝州陝県の人。吟詠をたしなみ、聞達を求めず、陝州の東郊に草堂を築き、琴を弾じ詩を賦した。草堂居士と号した。《草堂集》十巻がある。

（35）林逋（967～1028）字は君復、諡は和靖先生。錢塘（今の浙江杭州）の人。杭州の西湖に住み、隠者として一生を過ごした。《林和靖詩集》四巻がある。本書第一編第二章第四節参照。

（36）惠崇、建陽（今の福建に属す）の人。一説には淮南の人。北宋初の詩僧で、九僧の一人と言われる。その名前は、歐陽脩の《六一詩話》に初めてでてくる。すなわち「國朝の浮図、詩を以て世に名ある者九人。故に時に集有り、九僧詩と号す。今、復び伝はず。余、少き時、人多く之を称するを聞く。其の一は惠崇と曰ふ。余の八人は、其の名を忘るるなり」と言う。

（37）寇準（961～1023）字は平仲。華州（陝西省華県）の人。真宗皇帝の宰相で莱国公に封ぜられたが、のち雷州（広東省海康県）に流されて死んだ。

（38）潘閔《叙吟》の語句。

(39) 林逋《自作壽堂因書一絕以志之》の語句。

(40) 西昆体詩とは、楊億(974~1020)、劉筠(971~1031)、錢惟演(962~1034)を中心として宋代初期の真宗朝及び仁宗朝初期の詩壇を席捲した詩体である。晩唐の李商隱を宗とした。西昆体の名は本来詩について言うが、西昆体詩の作者が同時に駢文の作者であったことから、広く当時流行の駢文を含めて西昆派の美文と言うこともある。歐陽脩は《記日本韓文後》のなかで、「是の時、天下の学ぶ者、楊、劉の作、号して時文と為す」と述べ、楊億や劉筠ら西昆派の作者の作る文章、すなわち駢文が当時流行していた様を指摘する。西昆という名称は、楊億が大中祥符元年(1008)に《西昆酬唱集》を編纂したことによる。楊億は、王欽若とともに景德二年(1005)に真宗より《歴代君臣事跡》(後の《册府元龜》)の編修の命を受ける。そこで、錢惟演ら十名とともに編修にあずかる。それに参加した文人達が詩の唱和酬答を行い、それらの作品を大中祥符元年に楊億が《西昆酬唱集》としてまとめたのである。

(41) 注(18) 参照。

(42) 劉攽《中山詩話》に「後進多竊義山語句。賜宴、優人有為義山者、衣服敗裂、告人曰、吾為諸館職掃墻至此。聞者慙笑」とある。

(43) 姚鉉(968~1020)字は寶成、廬州合肥(今の安徽に属す)の人。太平興国8年(983)の進士。《唐文粹》100巻は、十年の歳月をかけて大中祥符四年(1011)に成った。その特色は詩文賦は古体を取り、散文の方面では韓愈達の古文を大いに提唱したことである。本書第一編第二章第六節参照。

(44) 注(17) 参照。

(45) 契丹(遼)の援助により、五代時代石敬瑭が後晋を建てた。その際、中国の東北隅、燕雲十六州を契丹に割譲した。宋の建国後、この燕雲十六州を回復すべく、咸平二年(999)から宋は遼と戦いを交えた。しかし、回復できないまま、景德元年(1004)に宋は遼と澶淵の盟を結ぶこととなった。その後、四十年近くにわたって宋と遼の関係は一応安定していたが、タングートの李元昊が寶元元年(1034)に西夏を建て、その後宋の西北境に侵入し、宋はこれに対して必死の防衛戦を行った。こうした苦境に乗じて契丹(遼)は関南の地の割譲を要求した。この様に宋は北方の強敵・契丹(遼)と西北方の新興の西夏とも対峙した。この二敵に対し宋は絶えず緊張した姿勢と備えを保ち続けねばならなかった。

(46) 慶曆三年(1043)范仲淹が參知政事に進み、枢密副使には范仲淹門下の富弼が

任ぜられた。一方、当時発言力が増しつつあった諫官には歐陽脩、余靖、蔡襄ら范仲淹のグループが配置されていた。政治改革を決意した仁宗皇帝は、范仲淹らに改革案を提出するように求めた。それを受けて、改革の基本政策を述べた《十事を上る疏》を范仲淹らは連名で上奏し、その十項目を実施することを目指し慶暦の新政は行われた。その十項目は次の通りである。1、明黜陟（黜陟を明らかにせよ）2、抑僥倖（僥倖を抑えよ）3、精貢舉（貢舉を精にせよ）4、擢官長（官長を擢べ）5、均公田（公田を均しくせよ）6、厚農桑（農桑を厚くすべし）7、修武備（武備を修めよ）8、減徭役（徭役を減ずべし）9、覃恩信（恩信を覃すべし）10、重命令（命令を重んずべし）

(47) 北宋の第6代皇帝・神宗は、即位後間もなく王安石を登用して新法を行った。新法は国家財政の危機を解消し、農民を保護し、農業を発展させ、大商人の利益を抑圧し、その利益を官に収め、保甲を結成して、郷村の治安を維持し、国防の強化に資せんことを目的として実行された。

(48) 歐陽脩が韓愈の古文を称賛し、自らも古文を提唱したことは彼の多くの作品から窺い知ることができる。ここでは歐陽脩が初めて韓愈の文集に出会ったときの感動が表れている《記日本韓文後》の一節をあげて彼と古文の出会いを紹介する。歐陽脩は少年時代豪族・李氏の家で遊んでいたとき、たまたま韓愈の文集を見つけた。それは、ページが欠けていたり、分類や順序が混乱錯綜していたけれども、しかし彼はその文集を読んで次のように感じた。「之れを讀みて、その言の深厚にして雄博なるを見る。然れども予猶ほ少くして未だ悉くその義を究むる能はず。徒だその浩然として涯無く、愛すべきが若きを見るのみ」と。少年時代の韓愈の文集との出会いは、以後の歐陽脩の学問に強い影響を与えたと思われる。

(49) 歐陽脩が怪僻、艱澁の古文に対して不満があったことを端的に示す事例は、歐陽脩が権知貢舉となった嘉祐二年（1057）の科挙に表れている。この科挙で歐陽脩は太学体で書かれた答案を全て排斥し、蘇軾・蘇轍・曾鞏ら明快達意の古文の答案を採用した。これによって以後受験生の文章の傾向が変わることになる。この太学体については、古文家・歐陽脩が斥けたので駢文と言う見方もあったが、東 英寿《太学体考—その北宋古文運動における一考察—》（日本中国学会報40、1988年）の考察により、險怪奇澁、艱僻な特色を持つ古文であることが明らかになった。怪僻、艱澁の古文である太学体を歐陽脩が痛切に排斥したことからわかるように、彼はこうした傾向を持つ古文に強い不満があった。

(50) これは歐陽脩《梅聖俞詩集序》のなかに詳しい。歐陽脩は長年の親友・梅堯臣（字は聖俞）の不遇を見るにつけて、個人の境遇とその作品の完成度ということを考えさせられたようである。その中で歐陽脩は言う。「蓋し愈々窮すれば則ち愈々工みなり。然らば則ち詩の能く人を窮せしむるに非ず、殆んど窮する者にして後に工なり」と。つまり、困窮すればする程、その詩は素晴らしくなるという理論である。また、清水茂氏も《唐宋八家文 二》（朝日新聞社、1978年）の《梅聖俞詩集序》の解説のなかで「西洋はいざしらず、一個人の私的感情の表現よりも、社会的要素の多い中国の詩は、おおむね苦境にあった方がすぐれた詩を作るようである。陶淵明（365～427）も李白（701～762）も杜甫（712～770）も困難窮乏の中で詩を作りつづけ、その詩は今も燦然とかがやいているのではないか」と述べておられる。

(51) 歐陽脩に《李白杜甫詩優劣説》がある。そこで彼は「清風明月一銭の買ふを用いず、玉山自ら倒る人の推すに非ず、に至りて、然る後に其の横放を見る。其の千古を警動する所以は、固より此に在らざるなり。杜甫は白に於て、その一節を得たり。而して精強は之に過ぐも、天才自放に至りては甫の至るべきに非ざるなり」と述べる。吉川幸次郎氏は《中国詩人選集二集 宋詩概説》（岩波書店、1962年）の中で「また詩論家としての彼（歐陽脩）が、韓愈を好むのみで杜甫を軽んじ、杜甫よりは李白がすぐれるとしたことも啓蒙期の人物の認識不足とされる」と歐陽脩が杜甫を軽んじたことを批判する。この吉川氏の見解は、歐陽脩の他の作品を読むといささか訂正をせねばならないと思われる。たとえば、歐陽脩は《感二子》詩の中で李白と杜甫を麒麟と鳳凰にたとえている。つまり、歐陽脩は李白と杜甫をあくまで評価した上で、《李白杜甫詩優劣説》の中でその両者を比較した場合について論及し、李白がより自由奔放な点を称賛したと思われる。従って、歐陽脩は吉川氏の言うが如く、杜甫を軽視したのではなく、あくまで李白と杜甫を比べた場合において、李白の方が優れていると評価を下したにすぎないといえよう。

(52) 歐陽脩は慶暦四年（1044）三十八歳の時、《水谷夜行寄子美聖俞》という五言古詩を作る。その中で梅堯臣（字は聖俞）と蘇舜欽（字は子美）の両者の詩の特色を端的に描写している。該詩の中で「其の間にて蘇と梅との 二子は畏れ愛すべし」と梅堯臣と蘇舜欽を評価し、更に蘇舜欽については「子美の気は尤も雄けし 萬の竅は一つの噫を号す」とその豪放さを指摘する。一方、梅堯臣については「梅翁は清切を事とし 石もて歯を寒き瀬に漱ぐ……近ごろの詩は尤も古硬にして 咀嚼するに苦だ嘔み難し」と評価している。

(53) 歐陽脩《讀蟠桃詩寄子美》詩の句。

(54) 歐陽脩の《詩話》は今日《六一詩話》と称されることが多いが、歐陽脩の作品を南宋・周必大が編纂した《歐陽文忠公全集》には単に《詩話》としか表記されていない。歐陽脩は《詩話》という表記について詳しく語らないが、後に司馬光が《統詩話》を書くに当たって「詩話は尚遺す者有り。歐陽公の文章名声は及ぶべからずと雖も然かれども事を記すは一なり。故に敢へて続けて之を書す」と述べている事からも、歐陽脩の《六一詩話》は本来は単に《詩話》と呼ばれていたことがわかる。豊福健二氏に《六一詩話》訳注（一）～（五）（武庫川国文 16～20号、1979～1982年）がある。ちなみに、歐陽脩の《詩話》は、彼が中央政界を離れて汝州に引きこもってから作られているので、彼の晩年の作である。また、歐陽脩の《詩話》は、彼の随筆《帰田録》の成立過程と関連していると思われる。これについては、東 英寿《歐陽脩の『帰田録』について》（九州中国学会報第34巻、1996年）を参照されたい。

(55) 梅堯臣（1002～1060）、字は聖俞、宣城（今の安徽に属す）の人。国子監直講、尚書都官員外郎等の職を歴任した。歐陽脩は終生の友人であり、二人の間には延べ100回以上の詩の応酬があった。梅堯臣は詩を論じるとき、《詩経》、《離騷》の現実批判の伝統を強調した。本書第一編第三章第三節参照。

(56) 梅堯臣《答韓三子華韓五持国韓六玉如見贈述詩》の語句。

(57) 注（56）に同じ。

(58) 蘇舜欽（1008～1048）、字は子美、梓州銅山（今の四川中三）の人。景祐元年（1034）の進士。范仲淹の主導した慶暦の改革に関わり、そのため後に反対派の迫害にあい、職をおわれ蘇州滄浪亭に居住した。そこで滄浪翁と号した。彼の詳しい文学観については本書第一編第三章第三節参照。

(59) 「警時鼓衆」、「気横意挙」はいずれも蘇舜欽《石曼卿詩集序》の語句。

(60) 李觀（1009～1059）字は泰伯、建昌軍南城（今の江西に属す）の人。范仲淹の薦めによって太学助教、直講となった。詳しくは本書第一編第三章第四節参照。

(61) 李觀は、このことを《原文》の中に述べている。

(62) 曾鞏（1019～1083）字は子固、建昌軍南豊（今の江西に属す）の人。嘉祐二年（1057）の進士。官は中書舎人に至る。歐陽脩の門人で有名な古文家でもあり、また唐宋八大家の一人に数えられる。賈誼に対する評価は《讀賈誼伝》に詳しい。本書第一編第三章第四節参照。

(63) 王安石は(1021~1086)字は介甫、号は半山、臨川(今の江西に属す)の人。彼は唐代の詩人のなかでもっとも杜甫を評価した。王安石が杜甫を評価したのは、杜甫の憂国愛民の思想、己を捨てて人のために為す精神で、杜甫の人品と創作精神に理解を示した。本書第一編第四章第一節参照。

(64) 王安石は《四家詩》を編纂したとき、その順番を杜甫、歐陽脩、韓愈そして李白とした。つまり、李白を歐陽脩、韓愈の下に置いたのである。そのため、王安石の李白に対する見方に幾つかの説が伝わっている。たとえば、《鍾山語録》に王安石は「白の詩、俗に近く、人悦ばし易き故なり。白の識見汚下にして、十首の九首は婦人と酒を説く。然れども其の才豪俊にして亦取る可きなり」という記述があるように、王安石は李白を評価していなかったとする説が広まった。

(65) 王令(1032~1059)字は逢原、原籍は元城(今の河北大名)の人。至和元年(1054)王安石が開封に行く途中、高郵を通った時に王令は王安石に詩を投げ認められ以後二人の交流は始まる。王令において注目すべきは《答呂吉甫書》の「存詩所以載道」という主張である。「載道」については周敦頤の「文所以載道」が有名である。周敦頤と王令はほぼ同時代の人で、従って「載道」を以て詩を論じたのは王令から始まると言えよう。

(66) 王令《答呂吉甫書》の語句。

(67) 司馬光(1019~1086)、字は君實、世に涑水先生と称された。陝州夏県(今の山西に属す)の人。宝元元年(1038)の進士。《資治通鑑》294巻を編纂した。《司馬大正公集》があり、「文以明道」は彼の《文書》の語句。

(68) 司馬光《與薛子立秀才書》の語句。

(69) 司馬光《答齊州司法張秘校正彦書》の語句。

(70) 司馬光《迂書・斥莊》の語句。

付記：この《中国文学批評通史・緒論》を翻訳しノートを付すシリーズは、すでに《先秦文学批評史・緒論》、《兩漢文学批評史・緒論》、《魏晋文学批評史・緒論》、《南北朝文学批評史・緒論》、《近代文学批評史・緒論》を終えている。これまでのやり方は、甲斐が下訳を作り、東が検討し、甲斐が修正の後に注をつけるという方法を取ってきた(ただし《近代文学批評史・緒論》では秋吉氏に注釈をお願いした)。今回は、東の専門とする時代であるため、東が訳文を作り、甲斐が検討し、東が修正の後に注を加えている。